

# ふみの会 ニュース

■発行 ふみの会広報部  
■発行日 2004年7月6日(火)  
■連絡先 藤川博樹  
〒115-0045  
北区赤羽1-48-3-203  
TEL 03(5249)5797  
E-mail: microd@mdn.ne.jp  
http://www.mdn.ne.jp  
■編集 塚原、佐藤、蒲原(雅)  
蒲原(直)、藤川

NO.273

## 7月行事日程

### ■ニュース編集

\*原稿はテキスト形式にしてメールで以下へお送りください。

E-mail monten@pop06.odn.ne.jp  
編集日の前日までにお願いします。

### ◆7月24日(土) 16:00～

※四谷地域センター 11階

※地下鉄丸ノ内線「新宿御苑」下車、大木戸門口方面、徒歩5分

◆2004年度会費1200円の振込みをお願いします。郵便振替00170-1-18290です。



佃大橋(墨田川・東京)

■今年になつてずっと開高健を読み続けている。小説もエッセイも対談も面白いが、同じ作者ばかり読んでみると見えてくるものもある。あらゆるジャンルにわたって同じネタや描写が何度も出てくる。一度読んではずっと感心させられた文章も、再び同じ表現に出会うと鮮度が薄められてしまうということもある。どんな天才でも生涯の経験と表現には限界があり、ある枠組みに縛られるものだということを感じる。■そんな中で、やはりベトナムに関するものが一番動かされた。『渚から来るもの』『歩く影たち』などの長編短編、『ベトナム戦記』などのルポが創作活動の頂点ではないか。清新で生命力にあふれた文章は素晴らしい。これらの作品を開高健は三〇代で書いてしまっている。ベトナム以後は、寝て食べて飲んで釣つてということになる。■「人間は愚劣である」、それはアウシュビッツやシベリアの強制収容所、ベトナム、中東、イラクなどの戦争を見ればわかる。実にその通りなのだが、いくら人間に絶望したとはいえ、飲んで寝てばかりという以外の展開はなかったのか? 開高健に酒と料理と釣りを描かせたら天下一品だが、晩年の創作力は明らかに衰えている。晩年といっても亡くなったのは五〇代である。人間に絶望したというよりも鬱病の影響だろう。ベトナム以後、国家も政治も戦争も描かなくなったのは残念である。■いやいや、何年かして読み直してみると、絶頂期のギトギトしてエネルギッシュな文体よりも、晩年の淡々とした作品の方が枯れた味わいで良いなんて思うかもしれない。(F)

# 美咲の島

## 11

蒲原ユミ子

### 11 あたらしい計画

朝7時半。

すでに太陽がこい緑をまばゆく照らしている中、お父さんは役所に出勤していった。

お母さんは1階の広間でようやく引越し荷物である段ボールの片づけに取りかかっている。

美咲は朝食もすんだし、することがない。日記の宿題があるが、それは今から書くわけにはいかない。あのドークツ探険のことはまだ書いてないけど。

あれ以来、もうマミ子たちとは汗まみれになって遊んでいる。さす

がにドークツにはもう入る気がしないが。ふしぎなことに、島の大人たちは子どもたちがあんなことをやらかしたからと言ってドークツをふさいでしまおうとはしていない。「危ないことが十分わかったから、もう入ってはいけないよ」と叱られただけ。まあ、ふさぎきれないほどたくさんドークツがあるし、大人たちはほかにやるべきことがたくさんあるからかも知れない。

美咲は2階の自分の部屋のそうじも終わったし、まだ遊ぶ時間までそうとうあるので、お母さんのいる広間に行った。お母さんの手は働いていた時にもどりてきばきとむだがな

い。衣料品を分けながら、「もう着そうにもない物が多いわね。バザーがあったら出したいな」とつぶやき、美咲を見た。「ちよつどよかつたわ。美咲にちよつと相談したいことがあるのよ。お父さんはさんせいしてくれたいけれど」「なあに」「学校で聞いたことがあるかしら、島体験学校の話」

美咲は首をふった。初耳である。「町で企画しているのだけれど、都会の子どもを募集して島の暮らしを体験してもらおうの。我が家も提供したいなと思って」

お母さんたらすごいことをあつさりとしやべっている。「都会の子どもたちは息苦しくてかわいそうなくらいだけど、この島は美しくて生命力にあふれている。それに、美咲たちの学校ももう少し人数が多い方がいいし」

美咲はおどろきつばなしである。お母さんが島をほめるなんて初めて。しかも、見ず知らずの都会の子を家に泊まらせるとは・・・

お母さんは手を休めずしゃべりつづけた。「わたしは今のところ、外の仕事がないからよその子どもを育てるボランティアをしてみようかなと思うの。この家は部屋も多いから」

美咲は一人っ子だ。きょうだいがいたらいいなと何十回も思ったものだが、最近はおきらめていた。マミ子たちというたくましくてもおもしろい友達もできたことだし。けれど、美咲はお母さんの話にどきどきしてきた。側に行つて腰を下ろした。「よくわからないけど、いいんじゃない」

お母さんはうれしそうに笑い、「美咲ならさんせいしてくれると思うたわ」というと、仕事の手を休めて美咲のぞきこんだ。

「美咲はこの島へ来てからほんとうにたくましく子どもらしくなつたわね」

美咲はちよつと照れたが、すなおにいなすいた。お母さんはひとり言のようにつぶやいた。「お父さんの家族やり直し計画は成功だわ」

それから、美咲をいたずらっぽいで目を見た。

「お父さんがどうしてもこの島へ来ようとしたきっかけを知ってる？」

美咲は首をかしげた。お父さんはきれいな空気の中で家族らしい生活をしたといくり返し言っていたけど。

「美咲がね、ケータイ電話をほしがったでしょ」

そんなこともあったっけ。そう言えば、この島ではケータイを使っている人を見たことがない。お父さんお母さんのケータイもどうしちやつたんだろう。

「その時お父さんは、これはいけな-i-  
いと思っただけですって。ちょうど転勤の話もあったりしてし」

美咲はむずむずしてきた。この島へ引越してきたのは、てっきりお父さんの田舎への思い入れだと考えていたのに。自分が原因だったなんて。お母さんは悪びれないで言った。「わたしは大反対だったけれど、美咲のためと言われてしようがなくついて来たのよ」

「わたしも大反対だったよ」

お母さんは両手をぐうんとのぼして深呼吸した。

「今は、この島でできることをするのでもいいかなあと思えるようになったわ」

美咲はせこせこしてうるさい都会よりスリルに満ちいくらでも面白いことを発見できるこの島がだんぜん気に入っている。だから、都会の青白い子どもたちをこの島を体験させてやるのはとてもいいことかも知れない。

「島体験学校はいつから始まるの？」  
「これから募集して、9月くらいから受け入れたいですよ」

「だったら、早く部屋をかたづけなくちゃあ」

「もちろん、美咲も手伝うよね」

「あたりまえですよ。こういう話をもっとさっさとしてくれなくちゃあね」

美咲は段ボールの山を見上げた。新しい計画のためにお母さんといっしょに仕事をするなんて、美咲はわくわくしてきた。はりきっている美咲を見てお母さんは幸せそうにほえんだ。

# ジャンクタウン戦記 21

## 蒲原直樹



卑弥呼ファクションのラファエル

とは別人になった少女の笑顔に、反町は思わず赤面した。ラファエルはそんな反町を茶化すように言った。

「どうしたんですか？……お顔が赤くなってますよ、昼間からお酒でも飲んできたんですか？」

「いやあ、あんまり君が美しいもんだから」

素直に応えると、少女は一瞬キョトンとしてから苦笑した。

「反町さん、案外プレイボーイなんですね。カーリーもそうやって口説いたんですか？」

「……………」

こちらを睨む黒目の多い濡れた瞳に嫉妬の光を見て、反町は無言になった。

「カーリーと寝たんでしょう？……報告が来てますよ、白山神社の森の中で全裸で抱き合っている二人を見たって」

「……………」

「反町さんもただの男なんですわ、しかたないです、カーリーは一五には見えないし」

「そうなんだ……………」

反町はもう一度素直に応えた。

「一五とは思わなかったんだ、だから手前まで行ったけど、セックスはしなかった。本当だよ」

「……………」

今度はラファエルが黙り、しばらく気まずい沈黙が続いた。

「あの娘はダメですよ」ラファエルがボソッとつぶやいた。

「あいつは男を幸せにしません。何もかも見透してしまおうので、男性のプライドをズタズタにするんです。

誰にだって、恋人同士にだってプライベートは必要なのに、あいつの前では何一つ隠せないのです……つき

あつた男性はみんな気が狂ってしまいます、私にはそんなあいつの未来

がわかります」

確かにそうだ、反町は心の中でラファエルの言葉に賛成した。しかし

そんな恐ろしい未来を予言してしま

うラファエル自身もまた怖い存在ではないだろうか？

「じゃあ、ラファエルさんはいいのかな、男性を幸せにする自信があるの？」

反町がその気持を口にする、ラファエルはにやりとした。

「どうでしょうね？私は恋すると何も見えなくなってしまうんです。使徒ラファエルはいなくなつて、岡本麗子っていうただの女になるんですよ。……それにとにかく一八歳未満

ではないです」

少女は勝ち誇るように笑った。そして自然に反町の腕を取り、テラス

ハウスへ導いた。

「これを見てください」

部屋の真中に大きなテーブルがあり、その上に図面が広げられていた。建築物のものらしい豊大の青焼き設計図が数枚だ。反町は目を見張った。

「これは、魔窟の設計図ですか？」

「そうです」ラファエルは静かに応えた。

「わが『神のつるぎ』秘密工作班は昨夜東京港区に進軍し猫島建設本社

に潜入、金庫からこの青焼き図面を奪取したのです。防犯装置等は事前に無効化していましたからまだ会社

も警備会社も、もちろん警察も事件に気がついていないはずですよ」

「すごいな……これがあれば魔窟のセキュリティも無効化できるわけですね。攻撃のポイントを絞ることも

出来て、より大きな戦果が上げられる……決定的な情報ですね！」

反町の言葉に、ラファエルは満足そうにうなずいた。反町はテーブルに顔を近づけて、図面の詳細を読み取ろうとした。地上七層・地下二

層の建物の九つの階層がそれぞれ詳細に描かれている。地上部分は機械室・居住部分・作業場と分かれてい

て、それなりの構造が分かる。しかし地下部分は大きな空白になってい

て、何があるのかまったく読み取れなかった。

「この、地下一階と地下二階はどうなっているんでしょうねえ？」

「詳しくはまだ調査中です」ラファエルは応えた。

「魔窟の中心部分はその地下二階です。地下一階は二階を補充する部分

だと言えるでしょう。つまり中心で起る発熱や化学変化を緩和・中和

しているものと思われま

す」

「どうなんでしょうねえ？」

反町は一気に核心部分に触れた。「ラファエルさんはどう考えますか？……地下二階には、葛山湾に落ちた隕石ないし宇宙船があると思

ますか？」

ラファエルは黙って彼の顔を見つめた。そして、

「ほかに何が考えられるでしょうか？」と言った。

それから二人は魔窟の正体やそれに対する攻撃方法など意見交換した。どれもまだ世間話の域を出ない

もので、二人とももどかしい思いをした。反町はともかく少女から『魔

窟同が総攻撃をかける前に必ず連絡する』という約束を取りつけた。

途中で『週刊ディンゴ』取材グループの飯島カレンから電話が入り、反

町は彼らに迎えに来てもらうことにしてラファエルに別れを告げた。ラ

ファエルは彼を引きとめ、まだ何か言いたそうだったが反町は彼女を振り

りきつて屋敷を出た。電動開閉式の門を出ると、カーリーからメールが

入った。

『オカモトのユーワクに負けちゃダメだぞ！ソリマチ★！！アタシが一六になるまでミサオを守るのだ！

：Θガンバレ、ケンジ！\$↑』と書いてあり、反町は苦笑いした。唐島

から自分をラファエルの元に運んだと聞いたカーリーが、焦慮に駆られている様子が目に見えた。

(既婚者相手に操もなにもあったもんじやない、それにしても……)

おまえとは恋愛できない、とはつきり言ったはずなのに、カーリーはまだ自分を恋人だと思っっている。一六になりさえすれば抱いてもらえる、と信じこんでいる様子なのも頭が痛かった。しかしそれも砂糖菓子のように甘い悩みだった。

やがて見なれたワゴン車がやってきて反町の側に停まった。スライドドアが開いてカレンが飛び出し、反町に抱きついた。

「反町さん、よかったア、無事だったんやねエ」

「おいおい……」

反町はからみつくカレンを解き離そうとするが彼女は意外に力が強く、うまくいかなかった。運転席から不精髭がさらに濃くなった窪田が降りてきた。

「聞いたよ、大立ち回りだったってね」

「それでもないけど……」

「あんた一人残したのがまずかった、やっぱり僕らはいっしょに行動すべきだったんだよ」

「そうだったかな、おいカレンさん、放してくれよ」

「放さへんで、今後はずっとうちらと共同行動する、って約束せな」

「まいったなあ……」

ワゴン車の後部座席では松村が黙ってカメラを磨いていた。

彼らが向かったのは窪田やカレンが宿泊している葛山プリンス・ホテルの隣りの、パレスプラザ・イン葛山だった。ここで彼らは以前にエネルギー・センターで出会ったフランス人のジャン・ピエトロ教授にインタビューすることになっていたのだ。このホテルは名前は立派だが隣りのプリンス・ホテルの四分の一の規模しかなかった。そのかわりに古いホテルらしくシックでアンティークな雰囲気があった。宿泊客も外国人が多かった。

ロビーでしばらく待っていると、銀髪で長身の教授と赤毛で太った通訳のコンビがやってきた。彼らは挨拶を交わしてから奥の喫茶室に移動した。

「葛山町エネルギー・センターを何度か視察されて、どういう印象をお持ちですか？」

切りこみ役のカレンが質問の口火を切った。

「たいへん怪しく、おどろくべき欺瞞に満ちた施設だと思います」

教授は率直に語った。

「どのような点か？」

「第一に核分裂行程を公開していません。さらに、そこで発生したエネルギーをどういう形で取り出すのか、その過程が用意されています。みなさんもすぐお分かりになるでしょうが、あそこには送電線の本もないのです」

記者たちはうなずいた。

「外部からの電線も入っていないので自家発電程度の能力はあるのでしょう。でも、それとこれとは話が違います。第二に、あの建物の内部にエネルギーがあるというより、あの建物自体が生体反応を示しているように思います。ただのコンクリートの建造物ではありません。あれは

一種の生命体ではないかと思えます」

「まさか……」

教授の話すフランス語を赤毛が汗を掻きながら通訳する、その言葉を聞いて記者たちはあつけにとられた。反町はとりあえず反論した。

「あのセンターは東京のゼネコンが鉄とセメントで作った建造物ですよ。それがどうして命を持つようになるのですか？……ありえないことです」

「最初は鉄とセメントだったのでしょう」

すぐに再反論が返ってきた。

「数年をかけてすりかわったのです。あるいは分解しやすい材料を使ってあったのかもしれない。あの建物は、それ自体が生命体の食物だったのです。あの中にあったある生命体は、あの建物を食べながら成長し、建物と入れ替わったのだと思われま

す」

記者たちは言葉を失った。反町もカレンも手のひらに汗が浮かび、喉がカラカラに乾くのを感じた。

# スプリング・コンサート

中井 豊



東大阪市民会館で開催された大阪府医師会交響楽団のスプリング・コンサートを友人の松原静司さんと聴きに行つて一年になる。このコンサートが機縁となつて、内田博重先生を常任指揮者とする、この交響楽団に入団した。

学生時代、たまたま大学の交響楽団がベートーベンの「第五交響曲・運命」を演奏すると聞いて、この曲は高校生のオーケストラでも演奏されたことがあるという話を思い出し、第二バイオリンに加えてもらつたことがある。三五年ほど前のことだ。その折、当時は医学部教員だった内田先生が第一バイオリンにおられたように思う。

この内田先生と昨年のスプリング・コンサート直前に中華料理店のカウンターで隣り合わせになった。その席しか空いていなかったのである。

その人がバイオリンの内田先生かどうか心許なかったので、試みにスプリング・コンサートのチケットを取り出すと、それに応じるかのよう

に、先生は黒い鞆を開いた。中には演奏会の資料のようなものが一杯つまっている。何やら運命的な出会いのように感じた。「あの、内田先生ではありませんか？」

「ええ、そうですが……。」  
「今日、指揮をなさる……。」

「ええ。どうです、一緒にやりませんか？」

「はあ……。」

こうして交響楽団に入団することになった。ついでに、松原さんも入るだろう、と言つておいた。

松原さんは九州大学交響楽団でバイオリンを弾いていたという数学の先生で、かつて「題名のない音楽会」というテレビ番組に出演したのが自慢だ。室内楽の曲を練習している時、「こらっ、素人のような音を出すな！」

などと言う愉快な人である。

さて、スプリング・コンサート直後の練習に加わってみると、秋の定期演奏会の曲選びということで、

ベートーベンの「交響曲第四番」、ブラームスの「交響曲第三番」、チャイコフスキーの「交響曲第三番」を、いきなり初見で通す。とてもついでに行けない。最後に、二カ月後の「アート・フェスティバル」に参加するということで、シヨパンの「ピアノ協奏曲第一番」を練習した。こちらは練習すれば何とかなりそうだった。

吹田メイシアター（七月）での「アート・フェスティバル」本番では、曲がりなりに私も弾けたように思えた。隣で音大生が弾いてくれたことも幸いした。協奏曲でのオーケストラは、伴奏ということで、交響曲に比べて演奏し易いのかも知れない。

秋の定期演奏会（十一月）では後半のベートーベンの「交響曲第四番」とチャイコフスキーの「花のワルツ」だけに出演し、前半のポロディンの「ダツタン人の踊り」とドビュッシーの「牧神の午後への前奏曲」は遠慮した。この二曲は、弾けそうになかった。

こうして一年が過ぎ、本年のスプリング・コンサートを迎えた。今

回も前半だけに出演し、後半は各席で聴くことにした。残念ながら、後半は部分的にしか弾けない。前半はモーツアルトの「魔笛序曲」とグリーグの「ピアノ協奏曲第一番」で、後半はブラームスの「交響曲第三番」とアンコール曲。

当日はあいにくの雨だったが、聴衆は少なくなかった。どの曲にも暖かい拍手が湧き起こった。

忙しい中で時間を見いだし、音楽が好きで練習してきたことが感動をまねくのかも知れない。

素晴らしいソリスト達の腕前に魅せられながら演奏できること、オーケストラならではの多様で美しい音色が周りから響いてくること、練習の合間に内田先生・団員・音大生と色々な話ができること、その後松原さんと一杯やれること、演奏会の半分を鑑賞できること、など交響楽団での楽しみは数多い。

ほとんどの団員はよく練



最上川 (花巻・岩手)

習し、全てに出演しているが、どうやら私には演奏会で全曲を弾くのは無理のようである。この秋の定期演奏会でも、ベートーベンの「ピアノ協奏曲第四番」だけにしてみよう、とひそかに思っている。

# お金と人生

内田幸彦

封建時代から、お金や食べ物のこととを口に出すことは卑しいこととされ、「武士は食わねど高楊枝」と言ってきた。

しかし、人間、「オギャー」と生まれると、お金と無縁でいられない。お金は生活に不可欠だし、欲望の的でもある。お金に対する考え方によつては人生を誤ることも少なくない。お金は魅力も魔力も併せもつ怪物だと思ふ。

幸か不幸か、小さな商売をしてきたお陰で、お金の難しさについて多くの経験をした。様々の苦労、厭な思いもした。

父は「お金は儲けるより、使う方が難しい」と、よく言っていた。まだニキビ面の小僧だった当時は、その意味が判らなかつたが、成人して成程と実感した。

望むものはどんなものでもお金で買える。大は政治家・美女から、小は飴玉まで。だから人はお金に執着する。執着が強いだけに、気をつけないと我欲に負け、軽蔑されることになる。

どの社会にも吝ん坊はいる。お金があつても、誘つておきながら支払うとなると逃げる人、必ず値切る人、色々ある。すべて欲のなせる業である。幾ら留意しても、し過ぎることはない。

新しく交際う人にお金をからませてみると、どんな紳士面をしていても、水も滴る美人でも、すぐに本性を現す。見栄を張る人、狡い人、金遣いの荒い人、意地汚い人——こういった人達は、なりふり構わず本性をむきだしにするから面白い。

真面目に働けば、金銭的には平均

的な水準で終われると私は思う。ただし、大酒・賭事・色事・怠け癖があったは論外である。面白い、楽しい事には必ず危険が伴う。自分にブレーキの掛からぬ人は、心得るべきだ。

例えば、毎月五万円の貯金をする。年六十万円、十年で六百万円、二十年でも千二百万円になる。これ位のお金が貯まる頃には、それなりの必要が起きるものだ。家の改築、災難、あるいは子供の結婚、家族の病気などで消えてしまう。

コツコツ貯金しても、そのお金は消えてしまう運命にある。それを考えると、遮二無二お金を貯めるのも考えものだ。要るものは要る。その程度に考え、気楽にしている方がお金に制約されず、楽しく過ごすことができる。

今月は出費が多かったと思つていふと思わぬ所からお金が入つてきたり、逆に思わぬ収入があつて心豊かにしているとお金が重なつたり——お金というものは、入れば出てゆき、出費が嵩むと入つてきたりする。うまく出来ている。

前述のように、計画的な貯金だけ

では、必要な出費が生じて、まとまつた財産はできない。少々使つても減らない財産というのは、遺産とか土地とか株といった意外性のあるものでなければ出来ない。

財産はあるに越したことはないが、なくても気にすることは無い。戦前とは違い、現代は年金もあるし、子供に残すこともない。子供も一人前になれば自分の口は自分で賄うだろうし、親の葬式くらいはしたつて罰は当たらない。思うまま暮らし、それでも残れば子供にやればよい。残すための努力はいらない。

お金を主に考えて暮らすか、人生に重きを置くかで、一生も変わつてくる。それぞれの選択だが、お金のために節約・努力・辛抱するのは決して楽ではない。七十を超えた私にはそんな気力はない。残り少ない日々を如何に自由に楽しく生きるかに尽きる。

俗な言い方だが、お金を持つて死ぬる訳でない。お金は使うためにある。これまで四十年近くも自力で糧を得るため努力してきた。今更、節約も辛抱もしたくない。贅沢はした

くないが、せめて自分に合つた楽しみや生活はしたい。一匹狼のプライドもある。「お金より人生」「金は天の廻りもの」だ。

この六月、有り金はたいて郊外の中古住宅を買つた。眼下に見下ろす池・竹林は風景画のように心が和む。朝夕には鶯が訪ねてくれる。おまけに六六平米の畑までついている。文字通りの晴耕雨読の日々。

朝五時より七時半までは農作業。朝食が済むと株式売買の注文をし、昼まで文章を書く。夕方、早風呂に入り、ビールを飲む。毎日が充実していて実に楽しい。私の最初で最後の自由である。

**(新会員紹介)**

内田幸彦氏は岸和田在住のエッセイスト。

著書に、昭和初期の岸和田の歴史・名所・風俗をからめたエッセイ集『ふるさと岸和田』(二〇〇三年・中井書店刊)がある。趣味は墨絵・農作業。

◇**ニュース原稿投稿について**

・**投稿資格**  
会員は誰でもニュースに記事を投稿できます。

・**原稿の形式**

原稿のデータ形式はテキストファイルで、なおかつメールでの投稿が編集の都合上望ましいです。機材が用意できない場合などは紙またはフロッピーディスクの郵送でもかまいません。

データは、ワード、一太郎などのファイルでもOKです。ただし、それらのソフトで書式を設定しても意味がありませんので、ご注意ください。

デジカメなどの写真データも掲載可能。銀塩写真もスキャナーで取り込みます。

・**紙面の編集について**

ニュースのページ数や、編集の手間、費用などなどに限界がありますので、投稿原稿は全部そのまま載せられるとは限りません。都合によりカットしたり分割したりすることがありますが、広報部に編集の裁量がまかせられているということで、ご了承ください。

・**会費について**

会費は、年間1200円です。ニュース発行経費は、会費とカンパによつて支えられていますので、ご協力お願いします。支払は、郵便局に備え付けの郵便振替用紙を使つてください。80円切手15枚というのも好都合ですね。